

黒の教室

緒莉

画:水島☆多也

黒の教室



著：緒莉

画：水島☆多也
原作：BISHOP

CB オトナ文庫



プロローグ 学園長は牝奴隷

「あなたは何をやっているんですの！」
 明麗女学園の職員室に、よく通る鋭い怒声が響き渡る。
 「しっかりと気を引き締めておけば、そのようなケアレスミスなど発生しません！ たる
 んでいる証拠です！」
 「も、申し訳ありません、学園長」

叱り飛ばされ、身を縮めている女教師は、学園長と呼ばれた女より一回りは年輩だ、に
 もかわらずただか小テストの採点ミスでここまで責められてしまうとは気の毒だ、と
 この学園でただ一人の男である体育教師、上原大輔は苦笑いした。
 助け船を出してやろうと、構えている二人に近付いていく。学園長である有栖川芽香の
 機嫌がここまで悪いのは、おそらく自分のせいだからだ。

「学園長、そのくらいにしておきませんか」

「あら、上原先生ではないですか、ずいぶん久しぶりにお会いしますわ」
 「遅れて申し訳ありません、少々授業が長引いてしまっています」



SAEKA ARISUGAWA
有栖川 芽香

明麗女学園の若き学
 園長。気が強くプライ
 ドも高い。大輔に調教
 された過去を持ち、絶
 對服従している。

DAISUKE UCHAKA
上原 大輔

明麗女学園で、唯一の男性職員とし
 て働く体育教師。女子校生を調教し、
 若い女体を食べることが生き甲斐。

目次

プロローグ	学園長は牝奴隷	005
第一章	飼された恋心	016
第二章	お嬢様、飼育の母乳搾り	080
第三章	麻痺の授業はサマー泳	142
第四章	二人の奴隷宣言	200
エピローグ	特別授業は公開調教	241

登場人物



MAHIRU NARUKAWA 鳴川 まひる

優秀な成績を誇る新体操選手で、学園
 にはスズニツ特待生として入学した。快
 活な性格で、いつも周りに友人が集まっ
 てくるムードメーカー。

KAZUHA KUSUNOKI 楠木 和葉

大手製菓会社の社長を父に持つ品行方
 正なお嬢様。乳肉への性的快楽に反応し
 て母乳を吸い出さず、特殊体質の持ち主で
 自分の乳肉にコンプレックスを持っている。

YUME KOMINAMI 小南 結芽

物静かで、いつも水を含んでいる孤獨
 な少女。学力は超が付くほど優秀。大試
 もトップの成績を収めている。その反面、
 運動は人の苦手で体力もない。

NANAKO NOMIYA 野宮 菜々子

大輔が学生時代、近所だったよしみで
 家庭教師に就いていた少女。その縁で子
 どもの頃から大輔を慕っており、今で
 も好意を丸出しにして接している。

そこを軽く押し潰すように握ってやると浮香の背筋が極ましく震え、呼吸も死を増した。

「あっ、あんな……」それ、私の感じる様み方……はああ、ゾクゾクしちゃう」

「あら、端いばかりないで、ちゃんと用件を話せ」

「はっ、はい……あの、ご主人様のお耳に入れておいていただきたいことがあります……」

それは、大輔が担任をしているクラスの学生の学生の名だった。父親は国内有数の大手製薬会社、楠木製薬の社長というお嬢様だ。

「このところ、下校がかなり遅い時間になっているようです」

「脱泳部の試合が近いとか？」

「それが、たびたび部活を休んでいるという噂も一緒に聞こえてきて……これが普通の子でなければ本人に注意をすれば済む話ですけど、彼女の場合はそうではありませんから」

「楠木の家の中が不審に思うということか」

大輔は、学生も職員も女だけだった学園に突如現れた男だ。転職してくることが決まった時、楠木家の人間は大輔の身元や経歴について学園長である浮香にずいぶん質問をぶつけてきていたらしい。

「この学園の周辺を、見慣れない人間が数人うろついている、という話も聞いていますわ」



「……あんな」

「人を雇って調査しているということか……ふん、上流階級の親御さんは、娘に変な虫が付かないか心配でしょうがないようだな」

「んふっ、気の毒なお話ですわね。その大事な娘は、もうすでにご主人様に雇われてしまっているのですから」

「クラ、まったく」

そう、楠木相葉は、大輔が養物として定めた少女なのだ。しかも、担任を受け持ったクラスに属しているから、実に手を出しやす。

「私の方から、怪しまれない程度に牽制してみますが、あまり効果は見られませんが、今後もし何か手は打ってみるつもりですが、ご主人様も、警備だけはしておいていただきたいのです」

「わかった。気を付けておこう」

親に出しやばられて計略が破綻するなんてごめん。大輔は浮香の言う通り、周囲に注意を払っておくことにした。

「よく知らせてくれたな、有益な話だったぞ」

「んはあ……お褒めにあずかり光栄ですわ」

「褒美をくれてやる。受け取れ」

そう言うなり、大輔は両の乳首を握り込んで、思いつき切り引く張った。

「んひやあああんなッ！」

甲高い悲鳴を上げて、浮香はビクンッと背中を震わせた。

「ひいんッ!! 乳首ッ! 乳首ッ! い、んはっあッ! 潰れちゃいますうっ」

ぐぐぐと指を擦り合わせ、まらかさの中にわずかに張り詰めたふのある感觸を染しむ。

先ほどまで薄い色だった乳首は充満して赤くなり、ぶつくりと膨らんでいく。

「ほら、よく味わえ、このスケベ乳首で、牝の喜びつてやつをたふりとな」

「むひいんッ! 乳首ッ、クリクリしながら乳首押はすッ、んあッ、これッ、感じ過ぎますッ」

乳首をさらに捻ると、浮香の声がより大きく、艶やかになった。まるで嬌声のポリュームをいじるツマミのようだ。

「はひっ、ひんッ、ご褒美嬉しいですッ、んあッ、ご主人様、私の乳首、嬉しくて勃起止まらないのッ」

犬のように舌を出して、はあはあ荒い息をついている浮香は、まさに牝犬そのものだ。

胸への刺激だけでもうあでこはくし濡れらしく、甘酸っぱいような女の匂いが立ち上ってきているのがわかる。

「昼休みがもうすぐ終わるな……」一気にイッちまえッ」

親指と中指で敏感な乳首を掴まんで押し潰すと、淫香は電撃を浴びたように背筋を引きつらせた。

「んひッ、いひインッ！ いいですッ、乳首イイッ、これクルッ、ふぁッ、乳首アツメさちやいますのおッ！」

普通のなら重宝で泣き叫ぶような強い刺激でも、長年大輪に寝られていた淫香の体は快楽として受け取る。長い髪を振り乱し、狂喜の声を上げて乳首だけで上り詰めていく様は、何度見てもたまらなくいやらしい。

「もぉッ、ダメス……乳首ジンジン痺れてエッ、んぁんッ、イクイクイクッ！」

「ああ、イッてしまえ！ スケベ乳首で思いっきりな！」

「んッはぁッ、イクッ、イクますッ、スケベ乳首い、はしたなくイクますッ……イッ、いひイひイイッ！」

絶叫と同時に淫香の全身が大きく跳ね、ブルブルと連続して震える。牝の本能を目く録むエクスタシーの波が、乳首から体中に押し寄せているのが見て取れた。

「おらッ、もつたッ！ もつと勝手にイッて見せろッ！」

大輪は淫香の充満した乳首を捻り、ちぎればかりに引ッ張った。

「乳首、狂ってしましますのおッ！ あんッ、狂うッ、うひひいいいんッ！！」

一際強烈な絶頂を迎えた後、緊張していた淫香の体から、フッと力が抜けた。

「はふうっ……んぁ、あうん……」

「おっ」と

床に崩れ落ちそうになった体を、乳房を掴んで支える。

「はぁ、はぁ……ち、乳首い……思い切り、イッてしまいましたぁ……まだ、イヤらしくンッン、していますッ……」

「乳首だけでイクる変態なんて、お前くらいのもんだぞ」

うっとり余韻に浸っている淫香を笑っている、昼休みの終了を告げるチャイムが鳴った。

「おっと、ご主人様はここまでだな」

まだ就業時間だ。大輪はぐったりした淫香の体をソファまで引きずっていき、善良な教師の仮面をすっかりとがぶり直した。

第一章 穢された恋心

明蘭女学園はスポーツ方面に力を入れており、運動用の施設が充実している。そのため学力レベルもなかなかの学校なのだがスポーツ目的で入学を希望する学生も多く、スポーツ特待生も数多くいる。

学園がそういった方向に力を入れ始めたのは、淫香が学園長になってかららしい。体育教師である大輪が権勢と権威しやすくなるよう、学園全体をそういう方向に作り替えたからだ。

学園が誇る運動施設の中でもとりわけ立派なのが、プールだ。設備も充実しているし、レインコートも。本泳は体育の授業に組み込まれているから、プールは全学生により頻繁に使われている。だから、特別立派でも不自然ではないのだが、本当の目的は別のところにある。大輪が水着姿の少女達と心惹き合っていくことを楽しめるようにというところで淫香が新しく作ったものだった。

放課後、大輪はそのプールに来ていた。

広々とした空間には、水飛沫の音と少女達のはつらつとした声が反響している。今プー

ルを使っているのは競泳部の面々だ。当然彼女達は水着姿。それも授業用のスクール水着よりびつちりと肌に張り付く競泳水着を着用している。

職業が見慣れているから、大輪は否さ弾ける股体に極端の生地一つのみを纏う少女達を見ては顔色一つ変えずにいられる。それでいて、目はさりげなく彼女達一人一人を品定めしているのだが、明けて遅いほどにプロボーションが丸わりの水着を着ている女子校生達の中で、一際目立っているのが、楠本和葉だ。今日はちゃんと部活に参加していたよう

で、プールサイドに立ち、休憩中なのか他の部員達と談笑している。

「フワッ……うして見ると、やはり周りに比べて頭一つ抜けているな」

整った顔立ちに浮かぶ大人びた微笑みは、気品に満ちた優雅さを醸している。だからといって近寄りがたい感じがしないのは、柔和な雰囲気を持っているからだ。高貴さと柔らかなさがいかにミックスされた人柄ゆえか、和葉は同級生からも下級生からも人気が高かった。

しかし大輪のような男にとって、和葉の魅力は、人柄よりもむしろ素晴らしい体つきの方にあった。

發育のいい最近の少女達の中でも、殊更目を引く巨乳。制服姿でも十分にわかるその影らみが、水着姿だとさらに際だって見える。教師陣を含めても、あのサイズはそうはいない。もしかしたら学園一の巨乳かもしれないと大輪は思っていた。

「はい。自分で言うのは厚かましいかもしれませんが、私は自分が恵まれて育った人間だと、常々思っていますので」

「それはまったくその通りだろうな」

「和葉は生まれつきの勝ち組だ。家柄がよいのはもちろん、容姿だって恵まれているし、本人の努力もあるとしても、成績も運動能力も高い」

「ですから私も、自分が与えられた幸せを他の人にも分けてあげたいんです。そのために、私にできることなら何でもしようと思つて、いたのですが……ですが引き受け過ぎてしまったようで、自分の時間が取れなくなつてしまいました。こうして部活に参加するのも、実は一週間ぶりなんです」

「おいおい、そいつは自分のことを顧みなさ過ぎだろう。それじゃ体がなまっちゃう」

「そうなんです……ただでさえ全然泳げないのに、練習不足で……何とか遅れを取り戻したいんですけど、先生は大会レギュラーの練習を見るのに忙しいらしい」

「これは使える。と大輔は瞬時に計算した」

「だったら、俺がコーチしてやろうか」

「え？ 先生がですか？」

「これでも体育教師の端くれだからな。泳ぎ方を教えるくらいならできるぞ」

和葉は申し訳なさそうに頭を下げた。

「実はこのところ、頼まれごとが重なつてしまつて」

「頼まれごと？」

「はい……昨日は園芸部の方が、夏の花々の手入れ方を教えてくれないかと言つてきました。昨日は、本場での調理経験があるということで、演習部のみなさんにお稽古を見て感想を聞かせて欲しいと言われました。料理研究会は、イタリア料理のレシピを教えて欲しいと……」

「すごいな、あちこちの部活から引つ張りだこじやないか」

「他にも、下級生の皆さんからは勉強を教えて欲しいとお願ひされまして、私でお役に立てるならと、つい欲張つてしまいました」

「担任として二ヶ月ほど見てきたからわかるのだが、和葉は人の役に立つの生き甲斐としていてるような顔があった」

「なんでそんなに人助けが好きなんだか……もうんいいことではあるんだが、楠木ほどになると、ちょつと思慮だぞ」

「そうでしょうか？ 私はただ、皆さんにも幸せになつて欲しいと思つていただけなんですけど」

「皆さんにも、か。つまり、楠木自身は、今幸せなんだな」



18

發育がよいのは胸だけじゃない。大きなカーブを描く尻をはじめとして、全身の肉付きがよく、むっちりとしていて実に美味そうだった。

「ねつとりした目で和葉を観察していると、ふと目が合った。少々バツが悪いが、こで目を逸らしたり逃げたりしてはかえつて怪しいだろう」

「楠木、ちよつと来てくれるか」

「大輔は堂々と和葉の名前を呼んで、手招きした」

「何かしら、という感じで軽く首を傾げて、和葉がやや腰け足でこちらにやつてくる。二つの胸がたゆんだゆんと弾み、大輔の目を惹きつけた」

「すまないな、部活中に」

「いえ、何かご用でしょうか？」

「大輔を見上げてくる和葉の瞳に、怪しむような気配はまったくない。すっかり大輔を信頼しきつている顔だ」

「楠木が最近、遅くまで学園に残っていると聞いて気になつた。毎日のように下校時刻を過ぎてから学園を出ているようだが……どうした。何か事情があるのか？」

「大輔は汗ばみながら聞いたことをそのまま直球で和葉に投げ付けた。担任教師としては、なんらおかしいことではないはずだ」

「……すみません、ご心配おかけしてしまつて」

「でも、先生の（迷惑になるのでは……）」

「楠木は、誰かのために何かする時、迷惑だと思ってやっているのか？」

「いえ、そんな？」

「促だって同じだ。教える子の役に立てるなら、喜んでやるさ」

「先生……」

爽やかに笑って見せると、和葉は表情をはころばせた。

「ありがとうございます。では、ぜひお願いいたします」

「その時、休憩の終わりを告げるホイッスルが鳴った」

「この件については、また明日にでもゆくり話そう。あ、他の子には内緒で頼むな、ひきだなんだと言われては面倒だからな」

「はい、わかりました」

べこりと頭を下げてから、急ぎ足で部員達の元へ戻っていく和葉。そのふりふりと揺れる尻を見つめながら、大輔は口の端だけでニヤリと笑った。

「——せーんせい」

授業を終えて廊下に出るなり、大輔は後ろから声をかけられた。振り返ると、そこには一人の少女が立っていた。

「ん？ ああ、菜々——野宮か」

「わざわざ言い直さなくてもいいのに『菜々子』でいいよ、誰も聞いてないんだから」

「そういうわけにいかんぞ。目頃から意識しておかないと、ふとした時に下の名前で呼びそうになるんだよ」

野宮菜々子は、この学園に転職してくる前からの知り合いだ。実家が隣近所だったとしまで、大輔は学生時代、また子供だった菜々子の家庭教師をしていたことがあった。そのため他の学生よりも心理的な距離が近く、油断するとすぐに気安く接してしまいがちになる。

大輔は学園で唯一の男ということ、ただでさえ目立つ存在だ。菜々子一人だけ下の名前前で呼ぶような真似をしたら、周りからどう噂されるかわかったまんじやない。しかし菜々子は、大輔の態度がよそよそしいと不満らしい。

「先生に名字で呼ばれると、何だか距離を置かれて、いるみたいで、ちよつと煩しいんだけど」

「彼の教える子になった以上は仕方ないだろ。諦めてくれ」

「それはわかってますけど」

「彼の教える子になった以上は仕方ないだろ。諦めてくれ」

「それはわかってますけど」

わかつてますと言いつながら、菜々子は不服そうに唇を失せている。そんな顔をしていると、まだ子供みたいだ。

「近所のしがらみで菜々子の家庭教師を引き受けた時、大輔は正直なところ面倒だと思つた。しかし菜々子は聞き分けがよくて手が掛からなかったし、素直に懐いてくるものだから存外楽しく過ごせることができた。菜々子にとっては、よいお兄さん的な家庭教師だったと大輔は思っている。その裏では、自分の通つていた学園で汚名を顕教したりしていたのだが、

そうやって若い頃から顔を使いつけていた経緯は、女を犯し、調教するため教職に就いた今、非常に役に立っている。

「おーい！ せんせいっ！」

「ん？」

また誰かに呼ばれた、と大輔が何の気なしに振り返ると、

「おお!! やばっ、とまんる——」

「ドオオオオオッ!!」

「がはあッ!!」

何かが勢いよく背中につかつかけてきて、大輔は転びそうになったが、何とか踏みとまつた。軽くむせてしまい、菜々子が背中をさすつてくる。

「先生、大丈夫ですか」

「げほっ、あ、ああ、大丈夫だが……」

「あ、ほんと？ やー、それはよかったよかった」

「思ひれずに言つたのは、新体操部に所属している期間まひるだ。明るく活発な少女で、いつも大勢の友達に囲まれているのはいいが、少々活発過ぎるのが難点だった」

「やはは、ごめんね先生。思つたよりスピード乗っちゃつてて止まらなかったよ」

「廊下を全力疾走するなど、何度言はばわつてくれるんだお前は……」

「反省してるし、お説教もちゃんと聞くよ。でも、まずはあたしの話を聞いてくれないかな」

「話だ？」

「先生、今暇だよな？ フリーだよな？ 何も用事入つてないよね？」

「お、おう……」

勢いよく迫られ、大輔は思わず一歩下がってしまった。

「今日うちの部の顧問の時田先生が、風邪で休んじやつてても、このまじや部活ができなくて、困るんだよおー！ だから先生、代理で監督して！ 一生のお願い！」

「……まあわかった。そういう事情なら引き受けてやる。今日だけな」